ジョン・ゲイの発明詩『扇』と『トリヴィア』

海老澤　　豊

序

ジョン・ゲイの『扇』と『トリヴィア，すなわちロンドンの街路を歩く方法』を「発明詩」という観点から読み解く。「発明詩」の由来は古代の叙事詩に遡り，神々が人間の懇願を聞き入れて新たな事物を造って与えるという挿話に帰せられる。

最初に取り上げる『扇』の筋立ては，神々が作り彩色を施した扇を与えられたストレフォンが，高慢なコリンナの愛情を勝ち取るという他愛もないものである。だがゲイは二人の恋愛よりも，扇が発明される過程に多くの詩行を割き，また扇絵として描かれた種々の挿話が，古典叙事詩の「絵画的描写」（エクフラシス）風に展開されるという点で興味深い。

この詩は1713年12月に出版されたが，(1) これに先立ってポープはゲイに宛てた同年8月23日付の書簡で「暇を見つけて作品に磨きをかけて光沢を出し，できるだけ扇に仕上げを施してもらいたい」と推敲を重ねるように促した。(2) さらにポープは10月23日付けのゲイ宛書簡でも『扇』を携えて田園に行き，じっくり吟味してみたいと記している。(3)

ゲイも同年10月5日付のフォーテスキュー宛書簡で「作品の主題は扇で，そこに描かれた絵画と扇の発明の描写において，ある程度までウェルギリウスとホメロスの盾に倣いました。神々や女神たち，他のやや下位の神格を導入して，長さは700行あまりになりますが，よい個所は100行を越えないのではないかと不安です。あなたが目を通して，偏りのないご意見を述べて下さることを疑いません」と述べ，作品の一節を書き写して講評を依頼している。(4)

『扇』は『葡萄酒』(1708)と『田園の狩り』(1713)に続くゲイの三番目の韻文作品だが，『羊飼いの一週間』(1714)や『トリヴィア』(1716)に比べると明らかに劣っており，習作の域を出ていない。(5) ポープやフォーテスキューの指導を仰いだのも，ゲイ自身が作品の出来に満足していなかった証左であろう。批評家の評価も高くない。アーヴィングは『扇』が18世紀に版を重ね，仏訳や独訳も出たと言いつつも，「最も野心的だが，最も努力が報われなかった」作品と位置づけ，スパックスは『扇』が「まったく取るに足らず，ほとんど読むに耐えない」と言い放つ。(6)

完成度の低い『扇』を本稿で論じる理由は，これが事物の発明を主題にした一連の作品の嚆矢と考えられるからである。ボンドは『扇』が「発明詩として重要であり，美女を喜ばせ，彼女の虚栄心に対して有効だと判明した品物を贈ることで，彼女の愛を勝ち取るというモチーフを含む，疑似英雄詩に強い影響を与えた」と述べている。(7)

またブロイッヒは『扇』が「発明詩」の最初の作品であり，多くの面でポープの『髪の毛略奪』に影響を受けているが，逆に『髪の毛略奪』第2版に影響を与えたと指摘する。(8) 『髪の毛略奪』の2巻からなる初版は『雑詩集および翻訳』(1712)に収められたが，1714年に5巻に増補改訂された第2版が単独で出版された。(9) ただしティロットソンが「どちらがどちらから借用したのかを見極めるのは困難である」と述べているように，両作品の影響関係は複雑なために本稿では触れない。(10) もっとも『髪の毛略奪』の舞台となる上流社会の環境が『扇』ではほとんど無視されており，ゲイはむしろ扇に描かれた神話的な挿話を中心に据えているというボンドの意見は有益であろう。(11)

結局のところ，ゲイは『扇』を『折々に書かれた詩集』(1720)に収める際に，冗漫な詩行を削除するなど大幅な改定を施している。(12) 詳細については後述するが，とりわけ結末はまったく異なる。13年版では扇を贈ったにもかかわらず，ストレフォンはコリンナの心を勝ち取ることができないが，20年版では二人はめでたく結ばれることになる。本稿ではゲイの意図がもっとも反映されていると考えられる20年版をテキストに選ぶが，必要に応じて13年版にも言及することにしたい。

１．扇を作る

フローリーは18世紀英国における扇の流行について次のように述べている。(13)

> 紅をさし，白粉を塗った18世紀の美女が，この魅力的な装身具を手に持たずにいる姿を想像することは難しい。英国とフランスで，扇は次第に生活を映す鏡，時代の歓びとなっていった。政治的・社会的な出来事，文学，音楽，時代の流行と愚行が扇に描かれたのである。『ガリヴァー旅行記』が世に現われると，その主な場面が扇の上に映し出された。

1709年の『タトラー』第52号は，「扇は女性の鎧であり，我が身を守るために有効に用いられる」として，扇の動き一つで感情や考えを示すことができると述べている。(14) 同様にアディソンも1711年の『スペクテイター』第102号で「男性が剣で武装するように，女性は扇で武装するが，時には男性以上に効果を発揮する」ので，若い女性に当世風の扇の扱い方を指南するアカデミーを創設したという戯文を展開している。大広間に集められた女性たちは，ゆっくりと扇を開いて扇絵を見せる方法や，内に秘めた種々の感情を表わす扇のあおぎ方，時には故意に扇を床に落として拾い上げる動作を習うというのである。(15)

扇は詩の中でもしばしば歌われた。トンソンの『詩選集第3巻』(1693)に掲載されたフランシス・アタベリーの短詩を引こう。(16)

> フラヴィアは最少で最軽量の装身具を
> 抗いがたい技をふるって使うのだ。
> この扇は，卑しい手の中では，恋の道具として
> 小さな力しか証明できないであろう。
> だが彼女は，優美な雰囲気と態度をもって
> （言葉では語れず，無事には見られない）
> その気まぐれな動きを導くものだから，
> キューピッドの弓よりもひどい傷を負わせる。
> 比類ない貴婦人に冷淡さをもたらし，
> あらゆる男たちの胸に炎をもたらすのだ。
>
> (11. 1-10)

ポープも1712年の『スペクテイター』第527号に扇絵を主題にした短詩を寄稿した。(17)

> そよげ，優しい風よ，イオリアの羊飼いは言った，
> その間プロクリスは木陰に隠れて喘いだ。
> そよげ，優しい風よ，美しいデーリアが叫べば，
> 彼女の足元には若者が息も絶え絶えに横たわる。
> 見よ，喜ばしい微風が彼女の美しい体をさまよい，
> 彼女の唇に息吹き，彼女の胸で戯れている。
> デーリアがこの装身具を手にすると致命的で，
> かの名高い矢もこれほど確実に傷つけはしない。
> 両方の贈り物が贈り手に破滅的だと分かり，
> 恋する男たちはともに愛する者によって倒れる。
> だがこの輝く破壊者は罪もなく生きており，
> でたらめに傷つけるが，傷を与えたことも知らぬ。
> 彼女は扇絵の物語を注意深い眼で眺めると，
> プロクリスを憐れみ，恋人はその間に死ぬ。
>
> (11. 1-14)

これは『変身物語』第7巻で語られる挿話を素材にしている。(18) 森で猟をしていたケパロスは「アウラ」（微風）に来て私を喜ばせよと願うが，妻のプロクリスは「アウラ」が女性の名だと誤解し，夫が浮気をしていると思い込む。木蔭に隠れて夫を監視するプロクリスが物音を立てると，ケパロスはこれを鹿だと思って投げ槍を投じ，妻

の胸を貫いてしまう。ポープはこの物語が描かれた扇を，デーリアなる女性に献じたのであろう。後述するように，この短詩がゲイの『扇』に影響を与えた可能性は高い。

ここまで紹介した2編のエッセイと2編の短詩では，扇はキューピッドの矢よりも強い力を持ち，男性の心を惹きつける道具として，その効用が描かれている。また扇に描かれた絵柄が重要な役割を果たしていることも明らかだ。ゲイの『扇』がこのような時代の流行や風潮から生み出された作品であることは間違いない。しかしゲイの関心は扇の効用よりも，神々によって造られ，神話的な挿話が描かれる扇の製造過程にある。

ゲイの『扇』は「あの優美な装身具を歌わん」(1.1) と主題の提示に始まり，詩神の助力を願った後で本筋に入っていく。これが叙事詩の慣習に倣ったものであることは言うまでもないが，ゲイは自分が扱うのは，日蔭を投じるペルシアの大きな扇や，あおいでいると手が疲れる中国の扇ではないと脱線することも忘れない。『扇』が滑稽味を帯びた疑似英雄詩(Mock-Heroic)である所以である。

ストレフォンは長いことコリンナに惹かれていたが，彼女は彼のあらゆる努力をあざ笑うばかりであった。途方に暮れたストレフォンは，コリンナを振り向かせる贈り物を与えたまえとヴィーナスに祈願する。女神を祀ったシセリアの森の奥には洞窟があり，中ではキューピッドたちが役割を分担しながら弓と矢を，別の鍛冶場では数々の装身具を造っていた。

此方には未完のダイヤモンドの小十字があり，
これに愛する恋人たちは祈りを捧げるのだ。
彼方には磨かれたクリスタルの小瓶が見え，
強い香りで流行の憂鬱を回復させるのだ。
此方にはつなげていない粗い臭ぎ煙草入れがあり，
嘲られた伊達男が冴えた返答をするのに役立つ。
彼方には恋人たちの情熱の将来の記録となる
金を塗った紙の束が連となって積まれている。
此方には装身具の山の中に黒斑の杖が見出され，
象眼を施した毛抜き入れが地面に散らばっている。
彼方には魅力の温床たる化粧台が立っていて，
美を輝かせる武器を一つ残らず備えている。
付け黒子，白粉入れ，プルヴィル（化粧粉），香水，
止め針，化粧紅，へつらう鏡，黒鉛の櫛だ。

(11. 117-30)

注釈によれば，この描写は『アエネーイス』第8巻でキュクロプスたちが神々の武器を造る場面を模している。(19) ここでカタログ式に歌われる装身具も，自分の魅力を引き立てて同性に勝ち誇り，異性の関心を得る武器と言えるだろう。しかもこれらは高価な材料を用いて，キューピッドたちが腕によりをかけた工芸品と呼べるような代物ばかりである。

洞窟にやって来たヴィーナスが，羽を広げて美装を見せびらかす孔雀を手本として腕をふるうように命じると，キューピッドたちはあらゆる仕事を中断して扇の制作に取り掛かる。

親方のキューピッドは線を描き出し，
巧みな手で図案をデザインする。
待っていた愛神たちは喜んで設計図を見ると，
力を合わせて熱心に労働を遂行する。
この上なく巧みな技で矢を縦に裂き，
人を震えさせる矢を扇の骨へ作り替える。
風を送るふいごが眠れる炎を目覚めさせ，
燃え殻を吹き飛ばし，火花を蘇らせる。
彼らは矢の切っ先を炎の中で鈍にし，
響きを立てるハンマーで逆刺のある軸を折る。
これから小さなピン（要）を器用に作り出し，
そこから彼らの腕は広がる骨を開いていく。
彼らは今や等分のひだに紙を折っていき，
正しい距離に扇の中骨を大きく広げる。
そして骨組みの上に柔軟な幕を据え付け，
たちまち新しい装身具を完成させる。

(11. 175-90)

この扇を作る描写も，やはり『アエネーイス』第8巻で，ヴィーナスに懇願されたヴァルカンが，

キュクロプスたちに命じて，アエネーアスのために盾を鍛えさせる場面を踏まえている。ここで描かれるキューピッドたちは，無作為に人間に恋の矢を打ち込む悪戯者ではなく，まるで長時間労働に従事する勤勉な職工のようである。ノークスがこの描写について，絶え間ない労働に駆り立てられる「プロレタリア的な地下世界」と評するのも納得できる。(20) かくして分業制の手工業を思わせる作業を経て扇の原型が完成する。

ゲイはここでも脱線する。古代の女性は思考において純粋，視線に作為はなく，表情も温和であった。しかし戦争で使われる武器が，投げ槍や弓矢や剣や投石器から，大量破壊兵器である大砲へ進化したように，現代の女性も顔中をさまよう付け黒子，枝なす針金の上に聳え立つ頭飾り，小さな輪となってあふれる巻き毛で強力な武装をしているというのである。

しかしゲイが当世風の女性ファッションに目くじらを立てているのかと言えば，それは当たらない。以下の詩行でも，女性の様々な装身具を揶揄しているように見えて，その実ゲイは覗き趣味に陥りそうな強い好奇心に引きずられているとしか思えないのである。

いかに私は舞おうか，疲れを知らぬ翼を広げて，
さまざまな風習を辿りながら源まで昇るのだ。
どんな思考の力が，どんな調べが表現できようか，
女性の服装の常に様変わりする付属品のことを。
いかにきついコルセットが細い腰を引き締めるか，
いかにマントーの地を這うような裾を整えるか。
どんな空想が鯨の骨を束ねた大きな張り骨で
ペチコートを囲むことができるだろうか。
だが止まれ，出しゃばりな詩神よ，化粧室の
神聖なる秘密を大胆に解き明かすことは控えよ。
正しい距離を美女に対して取らねばならず，
信用の置けるメイド以外には何者も入れるな。
衣装箪笥の宝物や，光沢のあるマントが
地を擦る音を，詩の中で語るべきなのか。
咲き誇る花々が霜降りの金で固められた
豊かなブロケードの上着を広げて見せるのか。
眩暈のする詩神は主題から外れてさまよい，
流行の迷路の中で行き先を見失ったのだ。

(ll. 227-44)

女性の化粧室を詳細に描いた例には，ポープの『髪の毛略奪』(1714)，ゲイの都会風牧歌「化粧室」(1716)，スウィフトの「婦人の化粧室」(1732)などがある。(21) さらにゲイの『扇』を端緒として，詩人たちは女性の装身具を主題にした疑似英雄詩を次々と生み出していく。主なものを挙げれば，シュートの『ペチコート』(1716)，ブリヴァルの『服飾の技法』(1717)，ジェイコブの『スモックの略奪』(1717)，アーバックルの『嗅ぎ煙草』(1717)，ホークスビーの『付け黒子』(1724)，ホーキンスの『指ぬき』(1744)などがある。(22) テリーは「18世紀初頭に書かれた無数の疑似英雄詩は，消費者革命と象徴的な関係を持つ商品に注意を向ける」と指摘するが，(23) 詩人たちが「流行の迷路の中で行き先を見失う」ことを好んだのもまた一因であろう。

２．扇絵を描く

第2巻の冒頭でヴィーナスは，完成したばかりの扇を携えてオリュンポスの評議会に姿を現わし，列席する神々に向けて扇に描くべき絵について問いかける。まず処女神ダイアナが「貞節な物語」(l. 81)を描いて，処女の歓びとハイメン（婚姻の神）の苦悩を語れと発言する。ダイアナが提起する画題は，テセウスに誘惑されて捨てられたアリアドネ，アイネーアスに捨てられたディドー，パリスに捨てられたオイノーネで，扇には「二心ある男を真実の色彩で見る」(l. 124)ことを諭す絵がふさわしいというのだ。

これに対して嘲笑や皮肉を司る神モーモスは，神々の愛欲を描くべしと主張する。エンディミオンと抱擁する月の女神ダイアナ，曙の女神アウロラの誘惑をはねつけるケパロス，レダやダナエを凌辱したゼウス，アレス（マルス）と情事に耽るヴィーナスを網で捕えたヴァルカン。モーモスは

さらに愛欲とは無関係の図柄に触れる。笛を吹いているミネルヴァが川面に映った「膨れた頬，裂けた唇，萎んだ眼」(l. 174)を見て激怒し，笛を叩き折ったという挿話である。貞節を唱えるダイアナの情事を挙げるあたり，モーモスの意地悪さが強調されているが，他の例とは相容れないミネルヴァの挿話が語られるのは，第3巻へのつなぎとしか思われない。ただしモーモスはミネルヴァの不面目を晒す前に「美女に誇りを慈しまぬように警告せよ」(l. 167)と言っており，この挿話が高慢な女性に対する皮肉と解することもできよう。

第3巻では神々の快諾を得たミネルヴァが扇絵を描き始める。森や丘や谷が現われ，羊が草を食み，鳥が大空を飛び交う。ところがこの牧歌的な風景の上に重ねられるのは，陰惨な悲劇ばかりである。傲慢なニオベーは自分の出自や美貌を誇り，息子7人に娘7人という多産ぶりは，2人しか子のいない女神ラトーナに優ると豪語した。これを聞いたラトーナの子であるアポロンとダイアナは，ニオベーの子供たちを一人残らず射殺したのであった。ニオベーは嘆き悲しむあまりに大理石と化したが，その目からはなおも涙があふれ出ているという。

ゲイは『変身物語』第7巻に準拠して，ニオベーの子供たちが殺される場面を生々しく描く。

> ここでフィーバスが必中の矢を引き絞ると，
> 立ち上がった馬から彼女の初子は投げ出され，
> 彼の開いた指は緩くなった手綱を落とし，
> 真逆様に野に落ちると，青ざめた死体と化した。
> 女神の絵筆の下で，二人の闘士が体を折り曲げ，
> 見よ，その握力に二人の膨らんだ血管は膨張し，
> ダイアナの矢が二人の顔と顔を一つにし，
> 死が固い抱擁のうちに二人を結びつける。
> もう一人は此処で震えながら野から逃げ出すが，
> 神が追跡すれば，人間はその一撃を避けられない。
> この息子は嘆願するように手を掲げ，上目遣いで，
> 慎ましい賞賛の祈りを捧げながら死んでいく。
> この息子は腿から刺のある矢を引き抜くが，
> より確かな武器が鼓動する胸に突き刺さる。
> かの息子は傷ついた兄弟を起こそうとする間に，
> 死が彼の若さを枯らし，その凍った目を閉じる。
> (ll. 39-54)

これは一方的な殺戮であり，叙事詩の戦闘場面を思わせるまでの残酷な描写だ。女性の高慢を咎める神々の仕置とはいえ，このような血なまぐさい光景を扇絵にすることが，果たして適切と言えるであろうか。

次に描かれるのは，ポープが短詩にまとめたプロクリスの死であり，彼女は存在しない愛人（アウラ）に「嫉妬に満ちた不安」(l. 84)を抱いたがゆえに，過って夫に槍で貫かれた。続いて好戦的なヴォルシアの女王カミラが「戦利品への欲望」(l. 100)ゆえに戦場で命を落とす挿話が描かれる。13年版ではこれらの描写はかなり冗漫で，20年版では20行余が削除されている。ここでも虐殺されたニオベーの子供たちと同じように，プロクリスとカミラも血まみれになって死んでいくのであり，扇絵として不適切であることに違いはない。まるで信心をしないと地獄に落ちるぞと脅す地獄絵のようだ。

最後に水面に映った自分の姿に惚れたナルキッソスが，ついに水仙と化す絵柄が示される。ナルキッソスが血を流すことはなく，「花と同じように歳月が進むにつれて美は枯れていく」(l. 129)という一種のカルペ・ディエムを説いているわけだが，フックスが指摘するように，彼は青年であるから例としてふさわしいとは言いがたい。(24)

処女神ダイアナが貞節を説き，皮肉屋モーモスが愛欲を勧めるのに対して，叡智の女神ミネルヴァが描き出す4種類の扇絵は，若い女性に対して傲慢，嫉妬，物欲，虚栄を避けよと諭すお説教である。ゲイは「かくして扇の上には息づく人物たちが輝いて，神々は皆その賢き意匠に拍手喝采を送る」(ll. 135-6)と言うが，3つの絵柄は血まみれになって死んでいく者たちに他ならない。扇絵とは他人に見せびらかすことを前提にして描かれるものであり，しかもこの特製の扇は，コリンナの頑なな心をストレフォンに振り向かせるための

武器であるはずだ。ミネルヴァの叡智とは一筋縄ではいかないものか。

３．扇を贈る

かくして完成した扇を携えて，ヴィーナスはストレフォンのもとへ向かう。落胆した若者は木々にコリンナの名を刻みつけながら，自分の運命を呪い，彼女の魅力を非難しているところであった。女神は彼に扇を渡して言う。扇には象牙や亀の甲羅（鼈甲）や真珠が使われ，インド人が輝かんばかりの色彩を施し，彼らの服装や習慣や宗教が表わされているので，英国の美女たちは精神を高めることができるのだと。これは天上で造られ，彩色された特製の扇ではなく，一般的な扇について語ったものと考えるよりない。ともあれストレフォンはヴィーナスから授けられた扇を持ってコリンナのもとへ急ぐ。

しかしその扇を作ったはずのキューピッドは，悪戯心を起こして（いかにも不自然な印象は拭えないが），別の若者リアンダーに黄金の矢を射かけてしまう。リアンダーはコリンナに胸の内を吐露し，彼女も彼の溜息に甘美な微笑で応える。1713年版と1720年版でもっとも異なるのは，この結末の場面である。13年版ではストレフォンが扇を贈ったにもかかわらず，コリンナの態度はあまりにもつれない。

> 今やストレフォンが来て，頭を下げて嘆願し，
> 贈り物を差し出すと，あらためて誓いを立てた。
> 陽気なコケットは，最後の征服に自惚れて，
> 震える若者から小さな装身具をひったくり，
> 軽蔑するような態度であたりを見回すと，
> 伊達男に微笑みかけ，新しい扇をもてあそんだ。
> (11. 227-32)

「震える若者」がストレフォン，「伊達男」がリアンダーを指すことは明らかであるから，神々が技をふるった扇も「コケット」たるコリンナにはまったく効をなさなかったことになる。

だが改訂された20年版では，ミネルヴァの描いた扇絵が不思議な効果をもたらす。コリンナはニオベーの運命を見て，ストレフォンに対する侮蔑を捨て，彼を価値ある客人であると思うようになる。次にプロクリスの胸に刺さった矢を見て，コリンナは自分の疑念を打ち払い，ストレフォンの真心を知るに至る。さらにカミラの運命を見るや，コリンナは「レアンダーの情熱を軽蔑するようになり」(1. 205)，外見や装飾品に心を向けることはなくなる。最後のナルキッソスの変身から，コリンナは花が萎れる前に愛することが肝要であると悟る。ミネルヴァの描いた扇絵のおかげで，ようやく二人は婚姻の神の前で結ばれることになる。

> かくパラスはストレフォンに娘と結婚せよと教え，
> ハイメンの松明が輝かしい炎であたりを照らした。
> (11. 211-2)

13年版のコリンナは自らの欲望にあまりにも正直であり，扇に対する物欲と男たちに対する高慢な態度は少しも改まっていない。これに対して20年版のコリンナは，ミネルヴァ描く扇絵の意図を見事なまでに読み取って，すっかり変貌を遂げる。扇は道義的な価値観をコリンナに押しつける一種の装置（矯正器）となっているわけである。だが図式的な感じは拭えず，阿鼻叫喚の地獄絵のごとき扇絵を見て，コリンナの性根が改まるとは到底思えないのである。

４．『トリヴィア』における「発明詩」

ゲイの『トリヴィア，すなわちロンドンの街路を歩く方法』は，地方出身の語り手が上京したばかりの徒弟やお針子たちに向けて，ロンドンで生き抜く方法を滑稽味を帯びた口調で指南するという作品である。語り手は三叉路を宰領し3つの神格を兼ね備える女神トリヴィアに導かれて，昼夜を問わずロンドンの街路をさまよいながら，大都会の愉しみや危険を次々と明らかにしていく。この作品については，すでに拙著『田園の詩神―十

八世紀英国の農耕詩を読む』において，語り手の歩行が農耕詩の労働にあたるという観点から論じたが，本稿では「発明詩」に関わる部分を再吟味する。(25)

『トリヴィア』は『扇』と同様に3巻から構成されるが，第1巻の最後に底上げ靴パトンの発明にまつわる挿話がある。沼沢の多いリンカンに自作農の父と暮らすパティは，遠くの野原まで乳搾りに出かけることを毎朝の日課にしていた。泥だらけの小道を慎重に進むものの，足首まで白亜の土埃に覆われてしまうのが，彼女の悩みの種であった。パティに一目ぼれしたヴァルカンは，彼女の足を雨や浸み込む露から守ろうと，地上で鍛冶屋に変身してスパイクを打った靴を贈呈する。パティはこれを気に入って接吻こそ許すが，それ以上は許そうとしない。

冬の寒さはなおも彼女を痛めつけ，頬のバラも萎れかかっている。これを見たヴァルカンは靴底に鉄の台座を取り付けた底上げ靴パトンを考案する。(26)

すぐさま新たな道具は彼の金床の上で輝き，
青ざめた乙女はパトンを履いて立った。
最早彼女の肺は体を弱らせる感冒で震えず，
彼女の頬には甦った美しさが花盛りとなる。
神は想いを遂げた。お追従は失敗したが，
贈り物が女性の貞操を征服したに違いない。
パトンは今や倹しい御婦人方を支えるが，
それは青い目のパティから名を取ったのだ。

(11. 275-82)

女心を得るために新たな道具を発明して贈り物にするという筋書きは『扇』と同様だが，パトンは扇に比べて実用性において優っており，パティも健康を回復することになる。

また第2巻の前半には，靴磨きの少年に関する挿話が1720年版で追加された。最高神ユピテルは地上で束の間の愛人たちを追い求めるのが常であったが，この悪徳は天の宮廷の隅々にまで伝染した。下水の女神クロアキーナもこの悪徳に染まり，街を徘徊する間に人間の廃品回収者に一目惚れし，炭殻集めの娘を装って男を誘惑する。クロアキーナは人知れず男児を産み落とすが，彼は孤児であるために乞食で身を立てるよりなかった。女神は我が子の苦労に心を痛め，「街路で修練を積み，利益をもたらす技を彼の手に授けよ」(11. 152-3)と神々に祈る。

力の強いイノシシの丈夫な剛毛を用いて，
ダイアナは刷毛を作ってやった。太陽神は，
混み合う道の中でも，汚れた足を載せる
三脚台を与えて，彼の手間を軽くしてやった。
親切なネプチューンは彼の壷を巨大な鯨から
絞り取った臭い油で満たしてやった。火の神は，
その領土から煙る雲が立ち昇っているのだが，
この惜しみない贈り物の中に自らも加わって，
煤で新たな黒い光沢出しの技を助けてやった。
彼女は喜んで贈り物を受け取り，滑らかに下降し，
フリート下水溝に降りると，潮の下に身を投げた。

(11. 158-66)

実に親切なオリュンポスの神々は，位の低い女神クロアキーナに同情したのか，靴磨きに必要な道具（鯨油は煤と混ぜて靴墨にする）を与える。この引用部分が，『扇』でキューピッドたちが扇の骨組みを作り，ミネルヴァが彩色を施した箇所に該当することは確かであろう。クロアキーナは再び下水から姿を現わすと，息子に一揃いの道具を与えて「儲けなさい。人通りの多い街角に立って」(1. 203)と諭す。すると彼は繁華なチャリング・クロスの街頭で商売を始め，「皆様の靴を磨きます」(1. 216)という呼び声が王立厩舎やホワイトホールに木霊するのであった。

この箇所はウェルギリウスの『農耕詩』第4巻に収められた挿話を模したものだという注釈がある。(27) オルペウスの呪いによって，養っていた蜂をすべて失ったアリスタエウスは，母親の女神キュレネの助言に従って，屠った牡牛の腐敗した血から蜜蜂を自然発生させることに成功するという挿話である。確かに女神である母親の助けを

借りて生計を立てる手段を得るという点で，靴磨きの挿話とアリスタエウスの挿話には類似性があるかもしれない。しかし猥雑なロンドンの下水周辺で展開されるクロアキーナの挿話は，滑稽味を狙った疑似英雄詩の範疇に属するべきものである。フリート下水溝から姿を現わすクロアキーナの姿は以下のように描かれている。

女神は丸い波紋の中心から姿を現わし，
しなびた蕪の葉っぱを額に冠していた。
水の滴る髪は低く垂れて，細長く，漆黒で，
滑らかな黒玉や，光沢ある烏の背のごとし。
腰には一匹のウナギが丸く巻きついており，
後ろにぶら下ったボロボロの衣を束ねていた。
(ll. 195-200)

エイムスはこの描写を「喜劇的なグロテスク」と評する。(28) またジョウゼフ・ウォートンはクロアキーナの挿話が「野卑」であり，スウィフトから示唆を受けたものであろうと推測している。(29) スウィフトの名前が出たのは，「町の驟雨の情景」にさまざまな汚物が下水溝から押し流されるという一節があるためであろう。(30)

結び

『扇』は全体が発明詩の体をなしており，『トリヴィア』第1巻のパトン挿話と第2巻のクロアキーナ挿話も発明詩と考えることができる。これらに共通するのは，オリュンポスの神々が新たに作り出した品物で，人間が恩恵を授かるという構造である。古典作品に見られる「機械仕掛けの神」の一変種であると考えてもいいだろう。扇を贈ることでストレフォンはコリンナの愛情を我が物とし，ヴァルカンはパトンを贈ってパティの心を捉え，クロアキーナは靴磨きの道具を与えて乞食の息子を定職に就かせる。『扇』の筋書きが絵空事にしか思われない一方で，『トリヴィア』の2つの挿話では大都会ロンドンで懸命に生きるパティと少年が報われる。

ゲイは古典神話やギリシアの叙事詩に想を得ながらも，作品の中で神々が発明する事物は，扇，パトン，靴磨きの道具といった近代的なものばかりである。18世紀の英国に広まりつつあった事物を導入することによって，ゲイの発明詩は当時の風俗を垣間見せる貴重な証言ともなっているのである。

注

(1) *The Fan. A Poem. In Three Books. By Mr. Gay* (London: J. Tonson, 1714) 表紙には1714年と記されており，同年に第2版（再版）も出た。

(2) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George　Sherburn, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1956) 1: 188.

(3) *The Correspondence of Alexander Pope*. 1: 195.

(4) *The Letters of John Gay*, ed. C. F. Burgess (Oxford:　Clarendon Press, 1966) 5.

(5) *The Wine. A Poem* (London: William Keble, 1708), *The　Rural Sports. A Poem. Inscribed to Mr. Pope* (London: J.　Tonson, 1713), *The Shepherd's Week. In Six Pastorals* (London: Ferd. Burleigh, 1714), *The Trivia: or The Art of Walking the Streets of London* (London: Bernard Lintott, 1716)

(6) William Henry Irving, *John Gay Favorite of the Wits* (1940; New York: Russell, 1962) 75-6., Patricia Meyer Spacks, *John Gay* (New York: Twayne, 1965) 29.

(7) Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1932) 160

(8) Ulrich Broich, *The Eighteenth-Century Mock-Heroic Poem*, trans. David Henry Wilson (Cambridge: Cambridge University Press, 1988) 83.

(9) Alexander Pope, “The Rape of the Locke,” *Miscellaneous Poems and Translations. by Several Hands* (London: Bernard Lintott, 1712) 353-76., *The Rape of the Lock. An Heroi -Comical Poem. In Five Canto's* (London: Bernard Lintott, 1714)

(10) Alexander Pope, *The Rape of the Lock and*

Other Poems, ed. Geoffrey Tillotson (London: Methuen, 1940) 115n.
（11）Bond, 161.
（12）John Gay, *Poems on Several Occasions*, 2 vols (London: Jacob Tonson & Bernard Lintott, 1720)
（13）M. A. Flory, *A Book about Fans: The History of Fans and Fan-Painting* (New York: Macmillan, 1895) 35.
（14）*The Tatler*, ed. Donald F. Bond, 3vols (Oxford: Clarendon Press, 1987) 1: 367.
(15) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1987) 1: 426-9.
（16）Francis Atterbury, "Written in the Leaves of a Fan," *Examen Poeticum: being The Third Part of Miscellany Poems* (London, Jacob Tonson, 1693) 377.
（17）Alexander Pope, "On a Fan of the Author's design, in which was painted the story of Cephalus and Procris with the Motto, Aura Veni,"*Spectator*, 4: 380-1. また Alexander Pope, *Minor Poems*, eds. Norman Ault & John Butt (London: Methuen, 1964) 45-7. に採録。
（18）Ovid, *Metamorphoses*, trans. David Raeburn (London: Penguin, 2004) 288-91.
（19）John Gay, *Poetry and Prose*, ed. Vinton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 2: 501.
（20）David Nokes, *John Gay A Profession of Friendship* (Oxford: Oxford University Press, 1995) 132.
（21）John Gay, "The Toilette," *Poems and Prose*, 1: 181-5., Jonathan Swift, "The Lady's Dressing Room," *The Poems of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 2nd ed. 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1958) 524-30.
（22）Richard Terry, *Mock-Heroic from Butler to Cowper: An English Genre and Discourse* (Farnham: Ashgate, 2005) 85.
（23）Francis Chute, *The Petticoat: an Heroi-Comical Poem* (Dublin: G. Risk, 1716), Giles Jacob, *The Rape of the Smock: An Heroi-Comical Poem* (London: E. Curll, 1717), John Durant Breval, *The Art of Dress* (London: R. Burleigh, 1717), James Arbuckle, *Snuff A Poem* (Glasgow, 1717), Francis Hauksbee, *The Patch. An Heroi-Comical Poem* (London: E. Curll, 1724), William Hawkins, *The Thimble, an Heroi -Comical Poem* (London: J. Shuckburgh, 1744)
（24）Jacob Fuchs, "Versions of 'Female Nature' in John Gay's Fan,"*Studies in Eighteenth-Century Culture*, 21 (1991) 48.
（25）海老澤豊『田園の詩神—十八世紀英国の農耕詩を読む』（国文社，2005）
（26）Clare Brant, "Artless and Artful: John Gay's *Trivia*," *Walking the Streets of Eighteenth-Century London: John Gay's Trivia*, eds. Clare Brant & Susan E. Whyman (Oxford: Oxford University Press, 2007) 111. 当時のパトンの写真が掲載されている。
（27）*Poetry and Prose*, 2: 557-8.
（28）Dianne S. Ames, "Gay's Trivia and the Arts of Allusion," *Studies in Philology* 75 (1978) 213.
（29）Joseph Warton, *An Essay on the Genius and Writings of Pope*, 2 vols (London: J. Dodsley, 1782) 2: 251.
（30）Jonathan Swift, "A Description of a City Shower," *The Poems of Jonathan Swift*, 136-9.